

安楽寺だより

令和3年 春 No.4 1号

仙經を梵焼し樂邦に歸したまひる

「正信偈」より

だんだんと日中は、あたたかくなり、春の陽気も感じられるようになってきましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか

新型コロナワクチン接種も、医療従事者から始まり、高齢者の方へと続くということですから、当然、コロナも徐々に減少していくと思われれます。もう少しがんばっていきましょう

さて、私たちは、漠然ではありますが「幸せ」になりたいと願っています。「幸せ」という基準は人それぞれで違いがあるのでしょうか、幸せか否かは、自分で判断するしかないといえますが。

単純に、「幸せ」とは、自分の目的や夢がかなうことなど、思いが達成されるとき喜びなど願いが成就されたことで「幸せ」に思えることがあげられます。目的成就の幸せと、それとは別に、一生懸命生きて来て、振りかえって自分の人生を味わったときに感じる、どうにかこうにかひと山ひと山乗り越えてきたという思いからなる「幸せ」もあることでしょう。



親鸞聖人は、「師に遇えた」ことを「幸せ」と慶びをあらわされています。浄土の教え、本願他力の教えに導いてくれた恩師方七人を「七高僧」と尊ばれています。

そのひとりに、曇鸞大師と呼ばれる高僧がおられます。曇鸞は、若かりし時に病にかかり、不老不死の教えを得ようと仙術に没頭します。現代もそうなのでしょうが、当時の中国いや世界中が、不老不死という、いつまでも若くして死ぬことのない力を得ることが、何よりの「幸せ」と考えられていた時代です。

曇鸞は、その努力がみのり、長寿がかなう仙經の法門を身につけられ、喜び勇んで故郷への帰途につきます。その途中にインドから来られた菩提流支という僧侶に出会います。曇鸞は誇らしげに尋ねます「仏法に長生不死の仙術を超えるような教えはあるのか」と菩提流支は、応えます「たとえ仙術が、かない長生きできたとしても、煩惱を撒き散らして百年長く生きたところでなんになるか、釈尊の教えの中には、永遠に生きる方法が説き示されている」と『観無量寿經』を授けられました。曇鸞は、菩提流支の説法をきき、不老不死の仙經を焼き捨て浄土門の道を歩まれます。その後は經論を述べ、本願他力の道を説き、五逆十悪の凡愚が必ず救われていく道を推し進められました。

はかなき願いに心奪われることなく、変わることない阿弥陀仏の本願に出遇うことが何よりの「幸せ」と慶ばれています。

芳 英